



## 第97回(平成26年5月14日)定例会の研究発表要旨

## 「或る女」の一考察

前田 濱埜 静子 氏  
新発寒 小田 真二 氏

分科会「文芸サークル」の活動については、定期総会の事業報告「研究グループ活動」の中で、お知らせしましたので、ここでは、4月22日例会で話し合われた内容の一部を記して、「文芸サークル」の活動報告に代えさせていただきます。

## 1. 有島武郎著『或る女』のモデル探し (濱埜)

有島はモデルは居ないと書いているが、佐々城信子(早月葉子のモデルと思われる)について阿部光子が書いた『「或る女」の生涯』では信子について調べており、この本を読むと確かに似ている、モデルは居たと言わざるをえないのではないだろうか。モデルと言われた信子の評判は悪く信子の妹が有島に姉の名誉回復の為に有島に会見を申し込んで、会見の約束を取り付けたが秋子との自殺により会見は実現せず。信子の名誉回復にはならなかった。

又、この明治時代の女性の生き方を考えると「家」や「社会」に反逆し通して、自滅していった葉子の生涯を読み、現代はどうだろうか、この様に激しい性格の女性、現代でも同じ非難されると思うが、然し、今は男性に頼ることなく、一人でも生きていける選択肢があるとおもいます。

## 2. 「或る女」で有島武郎は何を…… (小田)

「或る女」に登場する主な女性の人物像を、次のように分析してみました。

葉子の乳母：若い時に亭主に死に別れて、後家を通して後ろ指一本指されなかった昔気質のしっかり者。

愛子(葉子の妹)：真っ向から葉子に挑戦するわけではないが、嫉妬心を抱かせる得体のしれない存在。

貞世(葉子の妹)：根底には頑ななものを秘めているが、表向きは柔順そうに装う(腸チフスに罹って高熱をだしながらも、家族にそれを気づかれないように振る舞う……など)。

親佐(葉子の母)：基督教婦人同盟の副会長を務め、その事業に奔走する男勝りのしっかり者。信仰と奉仕活動に生きがいを感じているのであろう。

女性に限らず、人は他人との折り合いをつけるために、自分の感情に抑制をかけて、仮面を被った生活をしているのがほとんどでないでしょうか？ その抑制のかけかた、そしてその結果として表現されたものがそれぞれの個性となって表出されるのではなからうか。上の登場人物の性格がその例であろう。しかし、抑制を取り払い、感情に正直に生きたらどうなるだろう。その一例が葉子ではないか。

読み手としての私は、「葉子のような生き方ができたらなあ！」と憧れを以て読み終わるのですが、作家としての有島武郎は、読み手に問題を投げかけているような気がします。

- ・社会秩序を優先し、自分の感情に抑制をかけた生き方
  - ・周囲との軋轢が多少あろうとも、自己に忠実に生きる生き方
- このどちらが、人間に求められているのか？ と。



## 第 97 回(平成 26 年 5 月 14 日)定例会の研究発表要旨

# 祖祖父母は、なぜ北海道へ渡ったのか。

西区八軒 條野雄一 氏



明治 8 年 5 月 21 日祖祖父母、源吉 (27 歳)、マン (12 歳) は原始林を切り開いた琴似兵村に入植しました。源吉は嘉永元年 1 月 15 日 亘理郡小堤村にて、父源太夫、母ヒサとの間に生まれました。父は亘理伊達家の下級武士 (陪臣) をして仕えており、亘理伊達家は仙台藩より、2,3850 石の知行地を拝領し、小堤村にて小城下町を形成しており、父は相馬との国境の吉田村に在住しておりました。当時の東北地方は度重なる飢餓に見舞われ疲弊しきっており、嘉永 6 年ペリー率いる米国艦隊が現れ開国を迫りました。翌年、日米和親条約が結ばれ国内は勤皇・佐幕と大きく変動、慶応 3 年大政奉還、翌年 1 月 3 日には鳥羽伏見にて戦いが起こってしまいました (源吉 20 歳)。1 月 20 日には仙台藩に会津追討令が出され、藩内は、勤皇・佐幕とに別れ激論が交わされましたが藩主は日和見的動きだった。そうこうする内に、西軍 (官軍) が海路松島に現れ会津追討を迫り、藩はしかたなく陣営を整え、亘理軍は湯の原口へと布陣、その後奥羽列藩同盟が成立、西軍と戦ったが敗北。慶応 4 年 9 月仙台藩は亘理の要害にて降伏調印式を行い、12 月には仙台藩に処分が言い渡され、石高 62 万石から 28 万石に減封。五郡の領地の没収、亘理、白石、角田の領地の没収となってしまう。南部藩は仙台家臣、陪臣に、この地と家屋の明け渡しを命じ、留まることは南部藩の農民となることでした。明治 3 年亘理伊達邦成は北門の警備と開拓を掲げ封建体制のまま自費にて、北海道有珠郡へと移住して行く (明治 14 年迄 9 回に分けて人員合計 2,609 人が移住)。郷里では、旧臣の帰農、脱刀等々の問題が起っており、開拓史は明治維新によって家禄を失った士族に対し授産と北海道の警備を兼ね屯田兵制度を制定、源吉は屯田兵に応募、妻マンの家族と共に琴似へと入植した。屯田兵は平時には軍事教育を受け、農務に付く事、戦時には戦線につく事が義務付けられる。琴似兵村は、明治 10 年西南の役、明治 28 年日清戦争に出征、明治 24 年琴似兵村は予備役に編入され、農務が主となる。明治 24 年源吉は、屯田兵服務期限満了により兵役が免除され、明治 26 年兵村地区改正により兵村の移転が行われ琴似兵村の 2 / 3 が移転。当家は八軒地区で本格的な農業経営を行い明治 37 年 9 月琴似兵村は兵役終了となり、一般の村と同じになり、兵村から出て行く者、入って来る者、琴似兵村は大きく変貌して行きました。この間源吉、マンの間には 9 人 (男 6 人、女 3 人) の子供が生まれ現在に至っております。

### 次回の予定

次回 (7 月 9 日) は、お二人の研究発表、菊地慶一氏の「北海道空襲と札幌空襲」、井塚重男氏の「札幌市の交通信号システム」を予定しております。

会場は**札幌市手稲コミュニティセンター** (手稲本町 3 条 1 丁目 3 番 41 号 TEL: 681-2133) です。

# 八千代会報

## ★ 文芸サークル

5月28日の例会では、三浦綾子著『母』について、釣本峰雄氏に基調提言をいただきました。

『母』は、小林多喜二の母親の伝記ですが、釣本氏は小樽市の地図を提示しながら、作品の解説をし、また、提言資料に「執筆の背景」として次のように紹介してくれました。

『母』は『銃口』と共に三浦綾子最晩年の作品。長編の銃口は3年で書いたが、母は10年かかる。夫の光世から多喜二の母を書くように頼まれたが、共産党のことは判らないと先延ばし。三浦綾子が部屋の中を歩きながら話す言葉を夫の光世が書き取り、毎日朗読する口述筆記。シオン教会の牧師から沢山の資料を預かりながら『母』が仕上がらないことを手紙で詫げる。S36.5.10に88歳で亡くなったセキを4月末に取材した設定で始まり平成に入って発行。

話し合いは、作品の内容から発展して、『蟹工船』（小林多喜二著）・『銃口』（三浦綾子著）も鑑賞したいという方向に進みました。有島武郎にも未練を残したまま、課題の尽きないサークルです。

今回は、平木重男氏（サークル会員ではない）もご参加くださいました。平木氏は、『銃口』『氷点』などを読まれていて、三浦綾子に関心を持たれていたとのことでご出席いただいたようです。時折、このように会員外の方も、来ていただいております。感謝いたします。（小田記）

## ★ 開拓史研究部

「開拓の村・記念館」グループは、名称を『開拓史研究部』と改めて、今月から例会を始めることになりました。例会は、会員が「文芸サークル」の会員と重複していることから、当面は隔月で進めます。

今月の例会テーマは「北海道開拓の概要」ということで、最初の例会にふさわしく、北海道開拓の歴史を概観して見たいと思っております。次回からは、開拓に関わる個々の話題を取り上げていく予定です。今、「依田勉三」が提案されています。（濱埜記）

## ★ 「データ整理部」を企画中

「手稲郷土史研究会」の中にある豊富な資料を有効活用するために、資料等のデータベース化を図るグループを発足させるべく、計画しております。〔発起人：村元健治（代表）・小田真二・立花顕次・濱埜静子〕

手始めに「手稲歴史年表」の索引作りから手掛けて、追々慣れてきましたら、手を広げていきたいと思っております。

ご賛同いただける方は是非ご参加いただき、ご協力をお願いいたします。

### 手稲研クイズ

札幌市の人口は1,940,659人だそうです（5月1日現在）。さて、手稲区の人口は何人でしょうか？ 次の■に適切な数を入れてください。（ヒント：札幌市の万の位と同じです）

手稲区の人口 = 1 ■ 0 8 1 9 人

## 『かつての星置川の流れを追って』

星置 村元 健治

先般、友人と星置川の流れを追う機会があった。

1つは、JR本線北側から西側の銭函方面に流れていた旧星置川の流路の確認をすること。もう1つは、本線北側を經由して北東方面に流れている清川(すみかわ)の確認である。

銭函方面への流れの確認では、ほしみ駅前から銭函へと続く道路の中央分離帯内にかつての旧星置川の流れ跡が残っており、それが銭函町にある『新宮商行銭函工場』敷地脇を通過して最終的には日本海に出ていることを確認した。

この流れで注目されることは、同工場の付近の流れである。現在こそ敷地外を流れているが、かつては敷地内を流れていたのではないかということを経験上からはもちろん、川沿いに成育していた河畔林と架けられた橋の存在からもそれぞれ確認することができた。

他方、清川の流れ跡の確認については、下手稲通の星函橋の所で分断されてしまった流れの上流側の流路跡の確認と、下流に位置する川の出口地点(最終流路)の確認を2箇所それぞれ行った。

星函橋地点の流れの確認では、この清川が後志(小樽)と石狩(札幌)の境界線となっていて、地図にも載っているだけに極めて重要な確認となるのだが、星函橋上流ではほしみ緑地の西側に、また下流では銭函工場群の南側の湿地内にかつての流れ跡が浅く窪んだ谷地形として残っていることをそれぞれ確認することができた。

他方、清川の出口については、かつてこの辺りがオタルナイ(アイヌ語で砂浜を流れる川という意味)と呼ばれていた為、清川はこの辺りではオタルナイ川とも呼ばれていたが、この川の最終的な流れは新川の掘削以前、現在も新川右岸に残っている三日月湖のような形の川筋の塞がった沼そのものに接続し、先に伸びて石狩湾(日本海)に注いでいたと確信した(右写真)。



この清川ルートも古地図はもちろん、現場の状況を経て確認したのだが、沼との関わり、最終出口等は河口の移動もあり推測の域を出ないもので、断定できたものでは決していない。今後、さらなる現地調査等を重ねて確信を得たいと考えている。

<追記>星置川はアイヌ語のホシボ(ボ)キ、ソーボクから来ているといわれ、その意味は崖の下、滝の下という意味だが、これらは国道5号線から星置の滝までの辺りを指している。幕末に活躍した松浦武四郎の地図では、はっきりとホシホキ(川)が紹介されており、その流れは山口地区を経て緩やかに北東方向に進路をとって日本海に注いでいる。この山口地区辺りの緩やかな流れは、清川と呼ばれているが、これは明治以降地元の人たちが、呼称したものと思われる。

この清川に対して、かつて濁川と呼ばれる川が流れており、清川より少し上流でオタルナイ川に合流していた。現在は、濁川放水路と呼んでよいだろう人工河川にまとめられている。

このように星置川は、上流、中流、下流部がそれぞれに、地域の人たちによる呼び名が使われていたことは判ったけれど、とくに地形の特徴を的確に言い表すアイヌ語の呼称には、改めて感服させられる。

ともかくも川の流路の変遷を探るといふ取り組みは、単に地理的な興味に終わらず人びとの暮らしなどとも関わってき大変に興味深いものである。